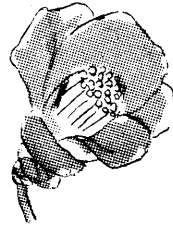


# 保育の計画における「主題」



坂元彦太郎

一

幼稚園のような幼児教育機関において、その保育についての予定や計画をたてることは当然のことであるが、年間なり学期なり、あるいは月なり週なりの、長期にわたって具体的な案をつくってそれを書きとめるなり印刷にするなりしておくことが、わが国でのならわしみたいになっている。おそらく、わが国の他の種の学校におけるやりかたが、園にもうつってきたのだと思うが、ある人たちはこれは非常に重要なことと考えているようである。私は、それほど重要欠くべからざることまでは思わないのであるが、一種の流行みたいになって、多くの人たちはこういうことを何をおいてもしなけ

ればならぬことのように考えている。今さら、こうした流行の功罪をいっても仕方のないことで、妙にきゅうくつな考えで自らを縛りさえしなければ、あつてもいいことである。少なくとも、こういうものをたてるからには、たてることがプラスになるように、心がけねばならないであろう。

こうした文字にした案を、よく「カリキュラム」とよんでいるが、この語が適正に使われているとは私は思わない。それはとにかくとして、こうした案をつくることに狂ほん(?)したり、できたものを金科玉条で動かしてはならぬもののように考えることだけはやめてほしいものである。一応の心覚えとして書きとめたり印刷してあるのであつて、常に臨機応変に計画を変えることができるもの

であることを承知して、たてたいものである。

こうした、こういう案についての根本的な心構えが適正でなければならぬとともに、その計画の具体的なたて方についても、心しなければならぬこと、気付いていなければならぬことが、いくつあるのである。たとえば、幼稚園教育要領に示してある六つの領域をどう考えるか、というようなこともあるが、この小論では、教育の計画をたてる際の単位になるようなまとめ方をとりあげて考えてみたい。すなわち、幼稚園教育の興味を考えていく場合の、実際の内容のくぎり方を問題としてみたい。

## 二

現在普通におこなわれているやり方は、いわゆる「主題」とか「単元」とか、あるいは「題材」とか称する単位を、若干数だけ順次に配列して、それで全教育課程がカバーできていて、とするようなやり方である。一つの主題、もしくは単元は、ある長さの期間持続するところの、一連の活動であり、つながりあった生活の様相である。そうした「主題」が寄り集って教育課程が成り立つが故に、いわば、全体を構成している有機的な単位であると考えられる。したがって、幼児の生活を展開してりっぱな教育的効果をあげるには、この主題を適切に考案し計画することが非常に大切である、と

考えている人が多い。率直に言えば、私は、こうしたものに、それほど重大な「魔力」を認めるものではないが、そういうものをたてることがたいへん便利な点もあって、たてる以上は適切にやくだつようにしなければならぬと思う。

ところが、案外、主題や単元そのものについての自覚や反省がゆきわたってなくて、ただ、思いつきで、もしくは他のをまねて、いろいろならべている向きが多いようである。私は、これから、主題や単元とよばれるものの、いろいろな類型をざぐりあてることから論をはじめよう。

厳密に言えば、「単元」というときには、経験主義的な単元をいうのであろうが、幼児の場合そういうものが成り立つかどうかは疑問であろう。狭義の経験的な単元といえば、幼児自体の計画にもとづく、幼児自体によるテーマの展開がなければならず、いわゆる「問題解決」的でもなければならぬ。しかし、幼児には、計画的に意図的に活動を展開することができず段階にはいたっていないのである。したがって、一歩がって、常識的な用語として、「主題」さらに譲歩して「題材」ということばを使うか、「単元」をそうこだわらないで用いるかであろう。

お互いに影響しあうのか、まねしあうのか、あるいは園の通有性から自然に似たものになるのか、おそらくこの三つともの特徴であら

うが、いろいろな園でたてている「主題」には非常に類似したものが多く、それを、分類してみると、私は、次のような、四種類のものにわけることができるように思う。

- (1) 目標をそのまま主題にしているもの
- (2) 経験の内容を主題にしているもの
- (3) 幼児の活動を主題名にしているもの
- (4) 生活の背景になつていているものを取りあげて主題にしているもの。

以下、単元の例をあげて、説明してみよう。

### 三

まず、第一の種類に属するものの例として「楽しい幼稚園」「からだを丈夫に」といった類のものがあげられるであろう。すなわち、その時期なり期間なりにおける子どもたちにもたらさせるいろいろな活動や経験がめざしている中心的なねらい、もしくはねらいを総括したのもをもつて、単元そのものの名前になっているのである。

第二の種類に属するものは、心ある幼稚園では「主題」なり「単元」にはあまりえらばないのが、普通のようなものである。たとえば「時計」といったものがこれに属するものといえよう。しかし、もし、一般の母親たちが考えているように、幼稚園では歌やおどりなどを

教えるところだ、として、そうした歌やおどりの名前そのままを、幼児指導の単位と考えるような向きがあるとしたら（残念ながらあるかもしれない）これに属するであろう。また、小・中学校の一部の教師のように、教える知識の内容（たとえば、日本の産業、「掛算の九九」）をそのまま主題とする人（たとえば、ひらがなを覚えること）があるとすれば、この類に属するであろう。

第三の部類に属するものとしては「汽車ごっこ」「えんそく」といった類のものをあげることができよう。そのほか、「端午の節句」「ひなまつり」「うんどうかい」といった類のものもここにいれるのがいいと私は考えている。実際に子どもが経験している活動そのものの中心なものか、いくつかの一連の活動を総括したものを、主題にするわけである。

第四の部類は、いままであげたものよりも、性格があいまいである。「梅雨」のような主題がまずこれに当るであろう。梅雨は、目標でもなければ、それを学習する内容でもない。やや、「活動」と似ておるし、関連はあるが、一連の幼児の生活経験の背景にあって、目標や活動を支えたりいろいろつたりしているものといえるであろう。

こうしてみると、一つの園で、あまりにも無雑作に、いろいろなちがった種類の主題をずらりとならべているのにびっくりするであ

ろう。私はそれを悪いというのではないが、無反省に雑然とならべ  
ていることに気が付き、そして、それなりに、適切な理解と実践につ  
とめるようであってほしいと思うのである。

実は、日本の園ではあまり見受けられないが、もう一種類ありうると  
思う。それは、幼児たちが、それをきっかけとして活動を展開しは  
じめるいとぐちになるような、機会になるようなものを、単元の名  
前にすることである。たとえば、「私の人形」のようなもので、こ  
れは目標でも活動でもなく、また、私の人形のことを勉強するので  
もない。はじめはお人形あそびをしてから、自然にほかのさまざま  
な活動をひろげていくのである。

#### 四

こういうような分析をすることは、分類自体に意味があるのでは  
なく、性格のちがう単元では、それに応ずる、ちがった考え方やく  
ふうが必要であるということをいいたいのである。

大ざっぱにいえば、普通の常識的な考え方では、学校教育を構成  
している単位は、知識や技能の内容のまとまりである。世人もそう  
考えるのが普通であるし、上級の学校にいけばいくほど教師の考え  
も、そういう方向に傾いている。そうした風潮を私たちは無視する  
ことはできないし、幼稚園でも、時の記念日を中心にして「時計」

といった単元をたてる向きもあって、それを全く排斥することはで  
きない。要は、「時計」のことを幼児たちにわからせるにしても、  
幼児に可能な範囲で、適切な目標のもとに、適当な活動をしくむよ  
うに、十分にくふう研究する必要がある。こうした主題をたてるこ  
とが、ふと気がゆるんで内容をじかに押しつけるような態度におち  
いりがちになるから、気をつけなければならない。

ところが、近代的な教育のやり方では、内容はある程度自明のこ  
ととしておいて、どういう具体的な活力において、そういう内容や  
ねらいなりに到達させるか、ということが前面に出てくるのであ  
る。端的にいえば、「単元」で指導をしていくというときの「単元」  
は、そもそもがこうした活動を前面に打ち出してきたときの、活動  
のまとまりをいうことばなのである。したがって、こうした、幼児  
の自発的な活動を重んずるような考え方の場合には、第三種の単元  
や主題が多くなり強くなるのが自然である。前述の「内容」を主に  
した主題のたて方が固定的で押し付けがましくなりやすいのと反対  
に、この種の単元は、活動はゆたかにいりどり多いものになると  
もに、うっかりすると、はっきりした目標を達することをなおざり  
にしたり、ふわふわとした中味のものに、触れさせただけにとどま  
る、という非難を招きやすい。いいかえれば、この種の単元の場合  
は、その活動をつらぬく方向としての目標や、あとに積み重なって

残る内容などについて、しっかりした考え方と実際のやり方とが具わらねばならない。

ところが、このごろはどんな場合でも、「目標」のことをやかましくとりあげ、目標のことをいつもひきあいに出すようになって、ことを読者もよくご存じであろう。固定的な内容と、流動的な活動と、いずれにもとるところはあるが、ともすると偏りやすいので、そのちょうど中間にあつて両方の特長を具えているような目標をおもな手がかりとして教育のことをやっといこう、という考えも、こうした勢いを生み出した、といえるであろう。教師が内容を主として、活動をも主として、そのねらいをあやまらないようにすべきであるし、活動をこどもにたのしませて、常にその奥に、向かう方向を見失わないようにすべきであろう。

私も、個人的な立場をいえば、やはりこうした目標を中心に考えていく態度が、いちばん穩当であると思う。幼稚園教育要領の各領域にわけてあげてある「のぞましい経験」の一つ一つは、教育内容ということにはなっているが、よく一つずつ性格を調べてみると、私のいう内容よりも、むしろ目標の性質をもっているものが多いようである。すなわち、「皮膚・髪の毛・つめなどをきれいにする」という項目も、皮膚の美容をじかに教える美容院のようなとりあげ方ではなしに、子どもたちと生活をともにしている間に、折にふれ

てそういう欠陥をこどもたちにわからせようという目標的な性格をもつものとして理解されねばならない。

二週間なり一月なりの、園における幼児の活動の全体を「たのしい幼稚園」や「じょうぶなからだ」のような中心目標で覆うようなやり方も、やはり、いろいろな点について気をつけなければなるまい。いいわるいは別として、それだけでは、こどもたちに生活させる内容や、どんな活動をさせるかは、はっきりしない。だから、こうした漠然たる大目標を主題としたときには、細密な具体的な活動や内容に關してのくふうが必要となるのである。

第四種の「梅雨」を内容や活動などと思ひあやまらぬことも大切であろう。もっと具体的に、はっきりした目標・活動・内容についての計画や反省が必要であろう。

さらに、一つの単元名で、二つや三つの性格をかねているのがあつても事實であるが、要は、単元の名のつけ方が、どうしても偏りがちのものであること、名前のつけ方が、すなわち、まとめる際の中心が一方に偏っているからには、常に、その足りないものについての反省やくふうが必要であることをいいたいのである。

(お茶の水女子大学)

\*

\*